

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：17201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K02889

研究課題名（和文）米国カリフォルニア州における黎明期多文化音楽教育に関する基盤的研究

研究課題名（英文）Fundamental research on early multicultural music education in California, USA

研究代表者

荒巻 治美（Aramaki, Harumi）

佐賀大学・教育学部・准教授

研究者番号：40315180

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、カリフォルニア州における黎明期多文化音楽教育の基盤について解明することを目的としている。黎明期は、社会状況が急激に変化した時期である。特にカリフォルニア州は、地理的・歴史的条件により、多文化的には先鋭的錯綜的な問題が存在したと解される。本研究では、当時の米国全体の社会的・教育的動向を踏まえた上で、同州の音楽教育を多文化的視点から探究した。具体的には、同州における音楽教育的事実を発掘し、それらを様々な方法で整理し、多文化的視点から分類した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

米国の多文化音楽教育研究は、1960年代の公民権運動以降の展開が研究対象とされ、そこに至る過程についての研究は少ない。特に一つの地域における歴史的な展開をたどる研究はなされていない。人種や民族の多様性や学校教育における教育開発の先進的地域であるカリフォルニア州は、多文化音楽教育の特質や問題点を探る上で最も有効な地域である。そのような地域における音楽教育の解明は、多文化教育開発の端緒にある黎明期の我が国にとっては喫緊の課題である。そこでは、いかなる形で人種や民族の音楽の多様性を認め、教育的に位置づけるに至ったのか、その基盤を明らかにすることは、多文化音楽教育的に学術的意義がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to elucidate the basis of early multicultural music education in California. The dawn period is a period of rapid social change. California, in particular, is understood to have had acute and complex multicultural problems due to its geographical and historical conditions. In this research, I explored music education in the state from a multicultural perspective, based on the social and educational trends of the entire United States at the time. Specifically, I unearthed the facts of music education in the state, organized them in various ways, and classified them from a multicultural perspective.

研究分野：アメリカ音楽教育史

キーワード：多文化音楽教育

## 1. 研究開始当初の背景

本研究では、米国カリフォルニア州における黎明期多文化音楽教育の基盤について明らかにすることを目的としている。本研究は、科学研究費補助金による、「生活主義音楽教育における創造性開発理論についての基礎的研究」「創造性開発を目指す生活主義音楽カリキュラム編成に関する研究」「創造性開発を目指す生活主義音楽科授業構成に関する研究」「米国ワシントン州における多文化音楽教育に関する研究」などこれまでの一連の研究成果を背景として、浮かび上がってきた問題である。米国における多文化音楽教育は、1960年代以降に展開したとされ、様々な先行研究が見られるが、それに至る過程については、明らかになっていない。本研究では、一般的に米国が自国における多様性を明白に認識し始める20世紀前半を研究対象とするものである。カリフォルニア州は、全米的にも地理的条件が特異な州の一つである。また、歴史的にも、中国人や日本人などアジアからの移民の流入、ゴールドラッシュや大陸横断鉄道敷設による全米からの移住者の増大など、人種・民族的にも多様な文化が存在していた。カリフォルニア州は、更に、学校教育でも、生活主義・経験主義教育を取り入れ、「カリフォルニア州全体が進歩主義教育の実践センター」と評されるほど、郡や市などの公立学校において、子どもをめぐる社会状況を踏まえた教育実践開発を様々な進めていた。人種や民族の多様性や学校教育における教育開発の先進的地域であるカリフォルニア州は、多文化音楽教育の特質や問題点を探る上で最も有効な地域であると思われる。そのような地域における音楽教育は、どのような形で、人種や民族の多様性の存在を認め、教育的に位置づけるに至ったのか、その基盤を明らかにすることは、多文化音楽教育開発の端緒についた、黎明期にある我が国にとっては、喫緊の課題である。それにより、全米的な社会的教育的動向を踏まえつつ、カリフォルニア州における音楽教育を多文化教育の視点から明らかにするという研究の着想に至った。

## 2. 研究の目的

本研究は、米国カリフォルニア州における黎明期多文化音楽教育の基盤について明らかにすることを目的としている。米国全体の一般教育的・音楽教育的動向を踏まえつつ、カリフォルニア州における当時の新たな教育的事実を発掘し、それを整理・分類し、内容を検討する。多様な民族や人種から構成されるカリフォルニア州において、所謂主流社会の音楽文化とマイノリティのそれが、どのような形で音楽教育に位置づき、どのような内容と方法で扱われていたのか、第一次資料をもとに検討をすすめる。

## 3. 研究の方法

### (1) 資料の発掘

研究期間全般にわたって、資料の収集状況を確認するとともに、新たに必要となる資料を収集する計画を策定した。国内の教員養成大学をはじめとし、関係大学の所蔵する資料の存在を探索し、収集した。海外の大学の資料の所蔵状況を確認したが、世界的な感染症拡大によって国際交流が制限されたため、直接的な資料発掘はかなわなかったが、収集方法を工夫した。資料のデータベースの存在を探索するなど、様々な手段を探りながら資料の収集に努めた。

### (2) 資料の整理・分類

収集した、当時の米国の一般教育的・音楽教育的動向に関する資料、カリフォルニア州に関する資料などを、研究目的に基づいて、整理し、分類し内容の検討を行った。具体的に研究対

象としたのは、NEA( National Education Association )など一般教育者団体や、MSNC( Music Supervisors National Conference )、MTNA ( Music Teachers National Association ) など音楽教育者団体などで発表された研究論文などである。更に、カリフォルニア州の様々な郡や市などの教育局で教師用に開発された教育課程や指導書、また、そこで選定された音楽教科書や参考書などの存在を確認し、整理・分類した。

### ( 3 ) 資料の分析

多文化音楽教育の視点から以下の内容について考察した。

全米的な社会構造の変化を踏まえた一般教育学的動向

全米的な音楽教育学的動向

カリフォルニア州における音楽教育学的動向

## 4 . 研究成果

### ( 1 ) 一般的教育動向

19世紀から20世紀への転換期は、大量の移民が流入した時代であり、20世紀初頭にピークをむかえたといわれる。とりわけ、この時期、ヨーロッパ東部・南部の地域からの移民が多かった。更に、一口にヨーロッパ系といっても、人種区分以外にも文化的多様性が存在していた。多様な人々の流入は、幅広い宗教的・言語的・文化的多様性をもたらした。カリフォルニア州には、既に先住民族が存在していた上に、もともとスペインの植民地であった。更に、中国や日本、メキシコ、大陸を横断してくるヨーロッパ系移民など、多様な人種や民族から構成される複雑な社会であった。当時の移民は、アメリカ社会から主流文化を受容すること、自らを米国人になることを求められていた。このような要請に応え、20世紀当初の教育者たちは、公立学校の重要な仕事の一つを、移民の子どもを一般的なアメリカ文化へと同化させることであると考えていたとされている。一方、当時、改革を進めていた学校教育は、生活主義・経験主義教育の原理に基づくカリキュラムや実践を指向しており、様々な民族の学習を含めたカリキュラムや授業の提案もされはじめていた。フォークソングとともに、フォークダンスも学校教育に取り入れられ始め、父祖の国に関する事柄を鑑賞する一助となった。しかし、1915年のNEAの教育研究誌に「東洋の音楽」の一つとして「日本の音楽」や「ハワイの音楽」などが紹介されるなど、全米的な社会状況の変化に伴い、教育者も多様な人種や民族の音楽を、自国の一部として内部に存在するものとして認めざるをえない状況が生まれていた。

### ( 2 ) カリフォルニア州における音楽教育的動向

カリフォルニア州の音楽教育は、1879年に学校教科として認知された。また、サンフランシスコでは、既に、1851年には公立学校で最初に音楽が教授されており、1880年には、主要な教科として位置付いていると報告されている。1916年になると、小学校全学年と全てのハイスクールにおいて、音楽教育コースの設置が確認されている。当時のR.ヨントの調査報告によれば、カリフォルニア州は、他の州と比較しても、高い水準の音楽教育がなされていたとされている。それは、1916年当時在職していた音楽教育指導主事の人数を全米的に調査した研究でも明らかである。そうしたカリフォルニア州の音楽教育の行政的施行状況を基盤として、各郡や市は、音楽科課程や教師用の指導書の開発を行っていた。ここでは、収集した資料の中から、数例を成果として紹介する。

『ロサンゼルス市の初等学校音楽のための教師用指導書』

ロサンゼルス市の初等学校における音楽学習の内容と方法が提案されている。歌唱教材は、音楽で教授されるべき全ての要素、つまり旋律、リズム、情緒、音の認知、呼吸法や発音などを

備えているため、歌唱活動は最も重視されるべきものとしていた。更に、合唱には、学校のクラス全体の良質な協同意識や仲間意識の形成に寄与するものとして、社会的価値を認めていた。音楽鑑賞領域では、ロサンゼルス音楽文化開発に貢献することを求められており、教材としては、オランダ、ロシア、オーストリア、イタリア、メキシコの音楽、キューバの国民的な旋律なども含まれていた。しかし、大半が西ヨーロッパの芸術音楽であった。教師が理解しておくべき音楽的事実として、「フォークソング」に関するものがあった。それは、一般大衆の人々のための旋律であり、かつ、純粹で自然発生的な音楽であるとし、他の教材と異なり、音楽理論と関連させない形で扱われるべきものとしている。「全ての国において、国家や王、国民的スポーツに対する興味と同様なものをフォークソングは保持している」とし、その教育的価値を認めている。とりわけ先住民の音楽に対しては、「インディアンは、ゴースト・ダンスや戦争ダンス、蛇のダンス、宗教的なダンスなどでの歌唱から多くの喜びを得る。ドラムは、彼らの主たる伴奏楽器である。合衆国政府は、今日、インディアン音楽を永続的に遺す努力をしている」と敢えて、特筆している。

#### 『オークランドの公立学校における音楽学習報告』

幼稚園、初等教育、中等教育の各段階における音楽学習の在り方について記載されている。そこでは、視唱力の育成と歌唱曲のレパートリーを増やすことなどが重視されていた。推奨される教科書では、イギリスやフランス、ドイツのフォークソングが主流ながらも、黒人や先住民、さらには、日本や中国の曲が教材として掲載されていた。

#### ロングビーチ市のシニア・ハイスクール音楽科課程

学校教育の目的の一つとして、学校や共同体、国や世界における良質な市民的資質の育成を掲げており、音楽科では、それに貢献するものとして「共同体歌唱の社会的価値の開発」「社会生活や子どもの社会性育成に資する歌のレパートリーを与えること」を重視した。そのために、集会での合唱、器楽（ピアノ、バイオリンなど）鑑賞、和声などのコースを設置していた。集会での合唱でも、外国のフォークソングを含む曲の歌唱を求めていたが、主として民族音楽が扱われるのは、音楽鑑賞領域であった。そこでは、他の芸術作品と同様に、音楽を通して、それを生み出した文化に親しむことを目指しており、特に歌の鑑賞で、民族や人種を視点とした分類で曲を組織している。そこでの学習課題は、「音楽の起源は、いつで、どのようなものであったか。古代・中世のシステムは、我々にどのような影響を与えているのか」である。「プリミティブ・ソング」として、インディアンの「ギャンプラーの歌」を、「人類初期の音楽」として、日本や中国、ギリシャ、ローマなどの歌を使用するように求めている。もう一つの学習課題は、フォークソングを国民性との関連から学習する内容であり、そこでは、英国、ラテン、ドイツ、スカンジナビア、スラブの国々、アメリカのフォークソングを教材として求めている。各国のフォークソングの特性をクラス全体や個人的に話し合い、各国の気候や土地、習慣の違いが、音楽の特徴にどのような影響を及ぼしているのかを発表しあう。その上で各国のダンスや楽器、歌自体を音楽的に分析している。

黎明期のカリフォルニア州の音楽教育は、大量の移民流入や州独自の人種や民族構成と、多様な文化の共存を踏まえた教育を志向する思想や実践を背景に、変容しはじめた時期であった。音楽教育では、イギリスやフランスなどのフォークソングが主たる教材であったが、大量移民などの社会的状況を背景として、徐々に、ロシアや東ヨーロッパ、そして一部ではあるが、先住民、日本や中国などのものも教材として編纂された教科書も使用されはじめた。今後は、更に、基盤形成期における音楽教育について、多文化教育的視点から研究を進めていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------